発　行　所（郵便番号100）
東京都千代田区丸の内2－4－1
丸ノ内ビルディング６１７号室
社団法人スウェーデン社会研究所
Tel (3212) 4007・1480
Fax (3212) 1447
編集責任者　岡　沢　憲　芙
印刷所　関東図書株式会社
定価300円（年間購読料四千円）
1995年1月25日発行
No.293 第27巻1号
（毎月1回25日発行）
昭和44年12月23日第3種郵便物認可

スウェーデン社会研究月報

No.293　Bulletin Vol. 27　No. 1

Japanska Institutet För Svensk Samhällsforskning
(The Japanese Institute for Social Studies on Sweden)
Marunouchi－Bldg.,No.617Marunouchi,Chiyoda－ku,Tokyo,Japan.

新年の御挨拶

Message for the New year

会長　松前達郎
President, Dr.Tatsuro Matsumae

新年明けましておめでとうございます。会員各位おかれましては、恙なく新春をお迎えのことと存じます。

さて本年1995年は、90年代の折り返し点であり、また21世紀まであと5年を残すのみの年でありますが、世界や日本を取り巻く情勢は誠に不透明な状況にあると言わなければなりません。こうした時期、スウェーデン社会研究所にとって、その社会的使命は新たな形で益々拡大して来ていると言うことが出来ると思います。

会員の皆様には十分ご承知のことですが、このスウェーデン社会研究所は、日本における福祉社会実現に向けて1967年に多くの方々のご協力により設立されました。以来今年で27年目を迎える訳ですが、その間に日本社会にスウェーデンモデルを紹介するなど大きな成果を挙げて参りました。しかしながらこれからこのスウェーデン社会研究所は、スウェーデンの事情を日本に紹介するとした初期の目的から飛躍しなければならない時期に来ていると言えるのではないかと思います。

ひとつには、スウェーデンからの高まる日本への関心に対して、こちらからの情報を発信していくという作業であります。勿論、高齢者福祉のためのゴールドプランといってもまだまだ名ばかりの日本が、スウェーデンにその範を求めなければならないことは沢山あるのですが、持続的な交流は一方向的なものからはなかなか発展しないのではないかと思うからであります。

次に、スウェーデン社会研究所が取り扱う分野をスウェーデンの社会のみに限定せず、デンマークやノルウェー・フィンランドなど北欧諸国や他の隣接したヨーロッパに求め、その扱う分野も福祉などの社会制度に止まらず科学技術や文化芸術にまで広げていくという点であろうかと思います。

このようなスウェーデン社会研究所の改革のためには、現会員の皆様のみならず更に多くの賛同者を募る必要もありましょうし、また研究所の財政基盤の充実も同時に考えて行かなければならないと考えています。日本経済は未だバブル経済の後遺症から立ち直らず、外部からの資金は多くを

目　次

新年の御挨拶 …… 松前　達郎 …… 1
New Year's Greeting
…… カローラ・タム …… 2
大江健三郎氏のノーベル文学賞受賞式典にて
…… マグヌス・ヴァールクヴィスト …… 3
グループホームとモダン老人ホーム
…… 山井　和則 …… 4
研究会報告 …… 7
平成6年研究所活動メモ …… 8

期待できません。研究所自らがその活動の中で資金を得ることの出来るよう更に工夫をしていくべきであろうと思います。そうした努力がスウェーデン社会研究所の新たな活力を生む源ともなって参りましょう。

以上、年頭に当たりスウェーデン社会研究所の使命について、私なりの考えを整理をしてみました。今年一年皆様のご指導ご協力により、スウェーデン社会研究所の活動を更に活発なものにして参りたいと存じます。何卒宜しくお願い申し上げます。

New Year's Greetings

Press and Culture Attaché

Mrs. Carola Tham

NEW YEAR GREETINGS TO THE JAPANESE INSTITUTE FOR SOCIAL STUDIES ON SWEDEN

With these lines I would like to greet all old and new members of the Japanese Institute for Social Studies on Sweden (JISSS) and wish you all a prosperous New Year.

During many years JISSS has pursued its valuable activities, concentrating on research, publishing, language classes and academic exchange. JISSS plays an important role in expanding the good relations existing between our two countries.

The ties between Sweden and Japan have been strengthened in many ways during the past year. A highlight was, of course, when Mr. Kenzaburo Oe was chosen by the Swedish Academy as the recipient of the 1994 Nobel Prize for Literature.

An important event for Sweden, during 1994, was when the Swedish electorate said YES to EU membership, in the referendum on November 13. I am confident that Sweden as a member of an open and outward－looking European Union will become an even more valid partner also for Japan. I am, therefore, sure that the years to come will see a further intensificaion of cooperation between Japan and Sweden.

Let me reiterate my best wishes to all members of JISSS and wish you all success for the coming year 1995 !

Carola Tham

Carola Tham
Press and Cultural Attache

大江健三郎氏の ノーベル文学賞受彰式典にて

The Impression of the Ceremony of the Swedish Academy to award the 1995 Nobel Prize for Literature Mr.Kenzaburo Oe

駐日スウェーデン大使　マグヌス・ヴーアルクヴィスト

The decision by the Swedish Academy to award the 1995 Nobel Prize for Literature to Kenzaburo Oe was no doubt a major event in the relations between Japan and Sweden.

As a result, Kenzaburo Oe and his works have been given enormous attention by Swedish media. And it is no exaggeration to state that Mr. Oe was the star among the different laureates during all the many events surrounding the solemn award ceremony presided over by His Majesty the King on December 10 at the Stockholm Concert Hall.

There are several reasons, in addition to his warm personal charisma, for the particular interest that Mr. Oe aroused in Sweden.

One is obviously his surprising familiarity with European culture and the fact that his first great literary experience was a book written by a Swedish Nobel Laureate, The Wonderful Adventures of Nils by Selma Lagerlöf.

Also, the Swedish public have been deeply impressed by the universal character of the main themes dealt with in Mr. Oe's books although the setting is usually specifically Japanese.

And his Nobel lecture, Japan, the ambiguous and myself, impressed everybody by its penetrating analysis and rich associations.

Last but not least, the Swedes were deeply moved by the way Mr and Mrs Oe have stimulated their handicapped son Hikari to develop his gifts as a composer of music.

For my wife and myself it was a privilege to attend the ceremonies together with the Oe family and to feel the very warm atmosphere surrounding them.

Magnus Vahlquist

グループホームとモダン老人ホーム

Modern old home and Group Living

やまのい高齢社会研究所　研究員　山 井 和 則

Mr. kazunori Yamanoi

花の似あうホーム

1993年まで2年間スウェーデンに留学していた。以前から短期訪問では、何度かスウェーデンを訪れていたが、やはりスウェーデンに住んで、スウェーデン語でお年寄りとじかに会話しながら学びたいと思ったからだ。カタコトのスウェーデン語が話せるようになったおかげで、多くのお年寄りと仲良くなることができた。

昨年も再びある視察に同行してスウェーデンを訪れた。私は花屋さんでバラの花を30本買った。「そんなにたくさん彼女がいるの？」と花屋さんが私をひやかした。その花束を抱いて私は昔よく実習させてもらったルンド市のモルテンスルンド老人ホーム（スウェーデン語ではオールデルドムスヘムという）へと向かった。

お年寄りのみんなも久しぶりの再会を喜んでくれた。1人1人に赤いバラをプレゼントした。スウェーデン人は花が大好きだ。そして何より、スウェーデンの老人ホームには花が似合う。

老人ホームが生まれ変わった

実は、このモルテンスルンド老人ホーム（1985年建設）はスウェーデンの高齢者福祉を大転換させたホームだ。80年代に建設された唯一の老人ホームで、これがきっかけになり、90年代の老人ホーム建設ラッシュを生んだからだ。80年代に社民党政府は、「老人ホームは救貧院なイメージがあるうえ、コストがかかる」という理由で、事実上、老人ホームの建設をストップさせた。そして、サービスハウス（ケアつき住宅）の建設を進めていた。しかし、私の住んでいたルンド市は、「救貧院のイメージでない老人ホームを建てればいい。これから後期高齢者が増えるから、老人ホームもますます必要になってくる」と反論し、国からの補助金をいっさいもらわず自主財源で老人ホームを建てた（スウェーデンは地方分権の進んだ国である）。

このモルテンスルンド老人ホームが非常に評判が良く、スウェーデンじゅうから視察者が殺到した。町の中心部から徒歩5分。各部屋30平米で、個室にシャワー・トイレつき。建物はきれい。2階建てで60人入居。各階30人ずつで、それがまた2つに分れているので、15人ずつのグループが4つくっついていることになる。

老人ホームも「在宅福祉」？

老人ホームの今までのイメージは、「狭い」「汚い」「町のはずれ」「大きい」「病院みたい」「高い

マルメ市に新築されたこの老人ホームも16人入居と小規模で、住宅基準を満たしたモダン老人ホームだ。

痴呆性老人向けグループホームのモデルとなった「バルツァゴーデン」（モタラ市）。家庭的な雰囲気でプロの介護スタッフとともに暮らすと痴呆症状もやわらぐ。

(行政コストが)」だった。しかし、逆転の発想で、ルンド市は、「ひろい」「きれい」「まちのなか」「小さい」「家庭的」老人ホームを建てたのだ。

おまけに、このモルテンスルンドについて追跡調査が、私の指導教授でもあったペル・グンナル・エデバルク教授（ルンド大学福祉学部長）によってなされ、「老人ホームのほうが行政コストが安い」ことがわかった。なぜなら、週25時間以上のケアを必要とする人、土日や夜間のケアを頻繁に必要とする老人の場合は、老人ホームのほうが高いからだ。おまけに、そのような重介護を要する人の中には、「淋しくない」という理由で老人ホームを好む人も少なくないこともわかった。

この時に出てきたのは「老人ホームは施設でなく、住宅であるべきだ」という考え方だ。実際、90年代にスウェーデンで新築されている老人ホームは居室が40平米くらいでミニキッチンつき。90年代に建てられいてる老人ホームや痴呆性老人向けグループホームの多くは「在宅福祉」にカウントされている。老人ホームが「在宅」とカウントされるほどグレードアップしたので、施設と呼ばなくなったからだ。このような住宅としての老人ホームは、それまでの老人ホームと区別してモダン老人ホームと呼ばれている。

社会的入院＝痴呆性老人＝ベットふさぎ老人

スウェーデンでは90年代に80歳以上の高齢者が増える。そこで、1992年1月に「エーデル改革」という高齢者保健福祉改革が行われた。「保健と福祉の統合」(老人保健の市への権限委譲) がその柱だ。

エーデル改革の背景には、財政難があった。スウェーデンには当時3500人の社会的入院の高齢者がいた。その社会的入院のほとんどが痴呆性老人だった。そのため、痴呆性老人は「ベッドふさぎ老人」と呼ばれた。

食事にもゆっくり時間をかけ楽しむ。大家族の雰囲気だ。

エーデル改革の一環として、「社会的入院費は市町村が支払う」という制度が導入れさた。さらに、「痴呆性老人ケアの責任は市町村」と明確になった。あわてたのは、今まで手のかかる痴呆性老人を県立病院に長期入院させていた「ずるい」市であった。グループホームなどの痴呆性老人の居場所づくりを迫られたのだ。90年代に痴呆性老人ケアの切り札として建設ラッシュになっているグループホームとは、6－8人の痴呆性老人と交代制のスタッフが共同生活をする場であり、小規模で家庭的な老人ホーム、あるいは老人住宅である。

エーデル改革以前（1991年）には3521人いた社会的入院患者が、改革の後（1992年）には1725人へと半減した。改革の効果はてきめんであった。その退院した痴呆性老人の行き場所の1つがグループホームであった。

痴呆性老人にさって家庭的なグループホームが居心地がよいばかりでなく、社会的入院を減らすことにより、行政コスト的に見ても高くつかないのである。

スウェーデンと日本の類似性

図表1は過去40年のスウェーデンの高齢者政策の発展を示したものだが、そのステップを見ていると、これまた日本と似ていることに気づく。その国の高齢者政権はイデオロギーや文化や国民性など以上に、その国の高齢化率によって決まるということだ。

高齢化率が10％を越えた頃から、老人介護が社会問題となる。それ以降、施設・病院中心から在宅中心へ、医療中心から看護・介護中心にと高齢化とともに変化していく。どこの国であろうと、高齢者の満足と社会コストの効率化を同時にはかろうとすれば、このステップをあがるしかない。日本はスウェーデンより30年遅れて、急激な高齢化を迎えている。だから、高齢化対策もその分遅れている。

高齢化率とともにスウェーデンでは施設は次の

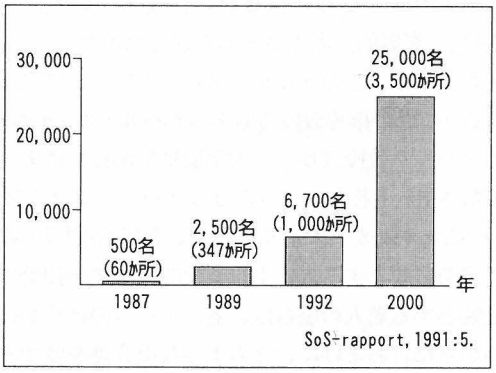
ように変化した。

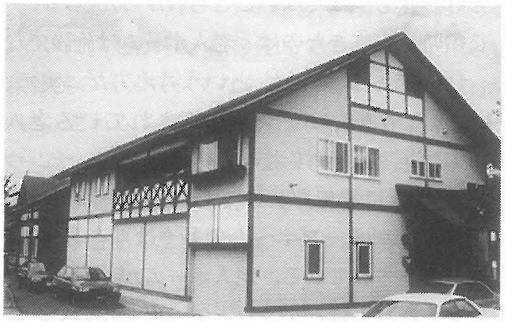
「在宅化」→「より広い居室」
「家庭化」→「より小規模」
「社会化」→「より住み慣れた地域に」

この3つの流れは、私が今まで実習してまわった英・米・デンマークの老人ホームについても言えることであり、世界の施設の流れと言っても過言ではない。このような施設の進化のシンボル、究極の姿とでも言うのがグループホームとモダン老人ホームだ。

グループホームやスウェーデンの高齢者ケアについてご関心のある方は、次の拙著にもお目通し頂ければ有り難い。
「グループホームケアのすすめ ～いま、痴呆性老人は何を求めているか？～」
(共著、朝日カルチャーセンター、1994年)
「スウェーデン発　住んでみた高齢社会」
(ミネルヴァ書房、1993年)
「スウェーデン発　高齢社会と地方分権　一福祉の主役は市町村」(ミネルヴァ書房、1994年)

図2 グループホームの現状と予測

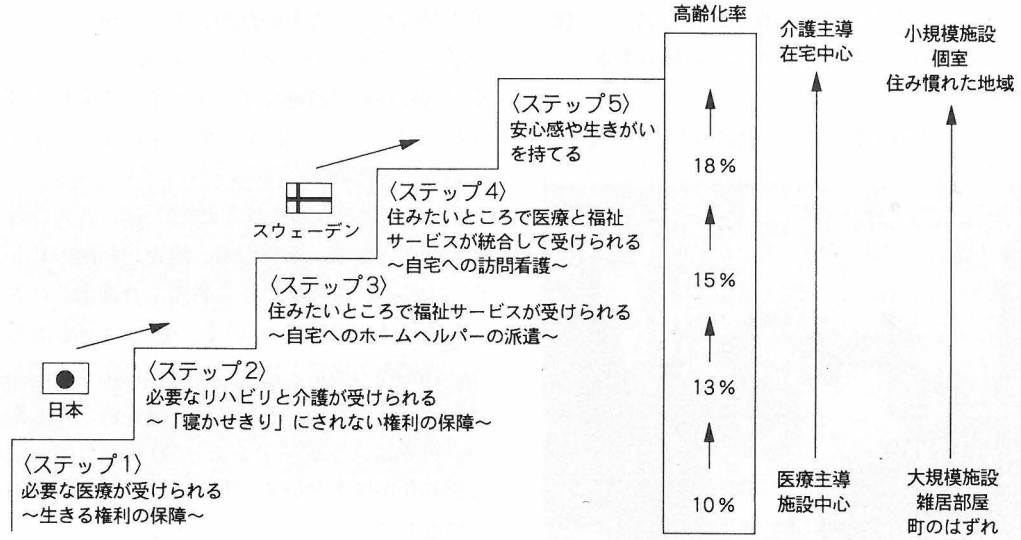




日本でも痴呆性老人向けグループホームが増えつつある。これは、秋田市にあるグループホーム「もみの木の家」(医療法人久幸会運営)

図1 過去40年のスウェーデンの高齢者政策の発展

(出典)「スウェーデン発住んでみた高齢社会」ミネルヴァ書房　山井和則著より



研究会報告

連続研究会「スウェーデンの女性と社会」

この連続研究会は、丸ノ内三井ビル4階（株）トーモク会議室にて（財）スウェーデン交流センターとの共催で開催された。

☆11月21日（月）午後6時から8時、講師に早稲田大学教授で男女共同参画委員会の委員になられた岡沢憲芙教授をお迎えして、生き生きと活躍するスウェーデンの女性たちの姿とそれを映す社会を活写して頂いた。まず話題となったのは、今回のスウェーデンの総選挙の結果によって政権を担当する社民党の閣僚名簿にみる女性議員の数、選挙中の左党の選挙名簿の配列の変更など、従来スウェーデンで女性を中心に積み重ねてきた社会参加に対する努力が今回の選挙で稔りある結果となったことや、今後の政治参加の場での課題にどのように考えられているのかについて述べて頂いた。次に最新の話題である13日に実施されたEU加盟の賛否を問う国民投票の結果の分析として、福祉・環境の問題も含めて男女平等の観点からこの結果を分析して頂いた。

■EU加盟国民投票
■94年11月13日施行
■投票率　82.4％

■加盟賛成　52.2％　2,795,332票
■加盟反対　46.9％　2,515,397票
■白紙　0.8％　48,179票

■賛成論・反対論の主たる根拠（上位7項目）

■賛成論者の根拠		■反対論者の根拠	
□経済	67	□デモクラシー	65
□ヨーロッパの平和	61	□国家の独立性	61
□雇用	54	□ドラッグ政策	57
□EUに影響を与える可能性	52	□食料品の品質	56
		□環境問題	54
□国家の安全保障	37	□社会的安全・社会福祉	52
□環境問題	36		
□デモクラシー	35	□情報公開原則	51

★Svenska Dagbladet 1994－11－15

■性別投票行動
□女性　賛成 53%　反対 46%
□男性　賛成 63%　反対 36%

■年齢別投票行動
□18-30歳　賛成 53%　反対 45%
□31-64歳　賛成 59%　反対 40%
□65-　賛成 63%　反対 36%

■政党別投票行動
□穏健党　賛成 88%　反対 11%
□中央党　賛成 51%　反対 48%
□国民党・自由　賛成 84%　反対 15%
□キリスト教民社　賛成 47%　反対 53%
□社会民主党　賛成 55%　反対 44%
□左党　賛成 12%　反対 87%
□環境党・緑　賛成 18%　反対 81%

★Svenska Dagbladet 1994－11－14

☆12月8日（木）午後6時から8時、講師にこの春アリス・リュッキンスの「スウェーデン女性史」を翻訳を完成され学藝書林より出版された中山庸子先生に、訳中の女性たちを取り上げて頂いた。

まず初めに、翻訳されたリュッキンスの本との出会いを、そして彼女によって描かれたたくさんの女性たちのいく人かを、時代を追いながら選んで頂き、それぞれの女性のユニークで個性的な活躍やその後の社会への影響なども含め、訳者としての感想も織混ぜながら話して頂いた。

こうした女性たちの活躍によってスウェーデンにおける女性の社会参加が進展してきた様子を解説して頂くとともに、最近行かれたスウェーデンでの体験から、男女平等のまだいろいろな問題を残している現地でのエネルギッシュな活動の状況についても報告して頂いた。

平成６年　研究所活動メモ

1.　24，スウェーデン語講習会（83回目）
2.　26，スウェーデンセンター　ジャパン主催による第1回、スカンジナビアブックフェアを後援、六
－3.　4，本木スウェーデンセンター１階にて開催。
3.　17，保育研究会（講師）荒井洌氏、（白鷗女子短期大学教授）
（テーマ）「最近のスウェーデンにおける保育政策の動向」
26，スウェーデン語留学ガイダンス（講師）アンデシュ・ベックルンド氏
4.　11，時事問題研究会（講師）岡沢憲芙氏、早稲田大学教授
（テーマ）「国民投票と選挙の年　－EUの政治・経済－」
6，スウェーデン語留学ガイダンス（講師）アンデシュ・ベックルンド氏
21，教育問題研究会（講師）小笠　毅氏、遠山真学塾主宰
（テーマ）「日本の特殊教育と北欧の統合教育」
5.　9，スウェーデン語講習会（84回目）
20，福祉問題研究会（講師）三瓶恵子氏、ジェトロ、ストックホルム事務所主任研究員
（テーマ）「スウェーデン社会の最近の動き　－福祉に関する改悪状況」
7.　1，スウェーデン社会研究所、平成６年度通常総会開催（於：霞ヶ関東海倶楽部会議室）。
18，教育問題研究会（講師）牛久保有理氏、遠山真学塾講師
（テーマ）「スウェーデン福祉教育」
－ハンディキャップのある子供を支える教育現場えける環境問題
20，移民問題研究会（講師）鈴木研二氏、東京都職員研修所調査研究室
（テーマ）「スウェーデンにおける移民の社会統合政策と自治体の役割」
9.　19，スウェーデン語講習会（85回目）
10.　21，政治問題研究会（講師）岡沢憲芙氏、早稲田大学教授
（テーマ）「スウェーデン総選挙とカールソン政権の課題」
27，福祉問題研究会（講師）訓覇法子氏、ストックホルム大学福祉学部大学院研究員
（テーマ）「誤解される福祉国家スウェーデン：その実像と近況」
11.　2，連続講演会「スウェーデンと日本を考える　－ふたりのスウェーデン人の体験的比較文化論」
(1)（講師）レネ・アンダション氏、スウェーデン大使館　二等書記官
（財）スウェーデン交流センターと共催
11，教育問題研究会（講師）青木のぞみ、遠山真学塾講師
（テーマ）「スウェーデンの人権教育　－子どもの権利条約・統合教育－」
21，連続研究会「スウェーデンの女性と社会」(1)
（講師）岡沢憲芙氏、早稲田大学教授（テーマ）「男女共同参画社会の背景」
（財）スウェーデン交流センターと共催
30，連続講演会「スウェーデンと日本を考える　－ふたりのスウェーデン人の体験的比較文化論」
(2)（講師）マリアンヌ・ミヤモト氏（財）スウェーデン交流センターと共催
12.　8，連続研究会「スウェーデンの女性と社会」(2)
（講師）中山庸子氏、当研究所スウェーデン語講師
（テーマ）「スウェーデン女性史のリーダーたち」
（財）スウェーデン交流センターと共催

第三種郵便物認可
昭和44年12月23日
スウェーデン社会研究月報　平成7年1月25日　第27巻　第1号　通算293号　毎月1回25日発行　編集責任者　岡沢憲芙　発行所　社団法人スウェーデン社会研究所　定価三〇〇円